
アメのちクモリ

アレス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アメのちクモリ

【NZコード】

N7039A

【作者名】

アレス

【あらすじ】

雨どうるさい人間が嫌いな積木が、中一始業式へと向かう。先輩となる、憧れの中学校二年生だったのに、大親友とクラスが離れ離れになり、気分は最低最悪。しかし、何時の日か、推定年齢45歳の先生へ恋してしまった積木。これからどうなる!? 積木の中学校生活！ 実話を基にしたノンフィクションw

第一章「最悪の恋」（前書き）

新作ですw

暇な時間に簡単に日記程度で連載していく小説なので気軽に

お読みください。

第一章「最悪の雨」

雨。

憂鬱な天気。せめて曇りくらいなら…。

河嶋 積木は、

ブツブツ独り言を言いながら教室へと向かつた。
雨ってなんであるんだろ…。

制服は汚れるし、髪は湿氣でボサボサになるし…。

大っ嫌い。

そう。確かに積木は雨が嫌いだったが、他にも
もう一つ苛々の原因がある。

斎藤加奈、小学校のころから気の合つ大親友と、
中一のクラス替えでクラスが変わってしまったのだ。
二人ともソレを残念に思っている。

あーあ…。クラス替えを決めた先生を恨むよ…。
しかも担任もまた最悪だし…。

田宮一美先生…。（勿論、ひとみと読まない。）

前の中1のときも私の担任だった男のヒト。
決して性格が悪いとか言うわけじゃないけど…。
ちょっと他の先生に比べれば怖いかも…。
モット面白いヒトが良かつたな…。

年も推定年齢50上でちょっとヤダし顔微妙つうか
キモイし…。

最悪。

積木は、雨に濡れている、積木にとつては中学校二年の
始業式の門を潜つた。

第一章「最悪の恋」（後書き）

はい、一章できあがりですw
ANCHORと一緒に連載していくので
投稿が遅いですが（ANCHORが主なので）
どうぞ付き合ってくださいw
恋愛小説は初めてで苦手なので、
感想、評価よろしくお願ひします。

「積木ー、おはよう！同じクラスだね！」

元隣のクラスの、加奈の次の親友、
ももき、ゆみか、まこと、さくら、

百木 裕美架が元気よく

木門から入ってまかにかの和室に押すりでまか
雨アソゾロツ二難ヘ七口一二、氣分は最低最悪ジ

雨の日が恋と離れか二日に 等分に量は悪かたが
今のクラスの友達を失わぬよう、元気に挨拶を返すこと
にした。「おはよっ、もも。あのさー、今日つ
新しいセンセー来るんだつけ?」上履きを履き、裕美架と
一緒に、現二年一組へと向かう。

—来ぬ事ニ! —シニ(因縁先生) 転勤

しちせつたからねー！新しい国語のヤンヤー誰だろ？

先生かな？私、話したことないー。上

裕美架がかなりのハイテンションで答える。

コヅチはそんな元気になれないよ……、と思いながらも、積木は元気な笑顔を見せる。

「到着――！」裕美架は、二年一組に

着くと元気な声で言った。

「おはよー」そして新しいクラスの皆さん挨拶。

（新しいと言）ても、この学級は一組までしかないし、この市は中学校が少ないから、小学校で別の中学に行く

人は一人もいないから皆知ってるんだけど。）

「おはよー、裕美架、積木。」元二組で積木とも
結構仲の良い菅原 すがわら あゆむ 歩夢通称モガが

積木と裕美架のところにやつてきた。

「お前等、始業式つてのにおつせーぞ！」

勉強、スポーツバリバリの女子からも多少人気のある男子生徒、佐々木 啓祐がふざけた口調で余計なコトを言つ。啓祐が発言したつてコトで皆がこつちをみて、啓祐にふざけて何か言つたりする。

あーあ…、くつだらねー。こいつ等つて何処まで単細胞なの…。積木は笑つてハシャギながらも、心の中でクラス皆を馬鹿にした。

「全校生徒の皆さん、始業式及び着任式を開式いたします。生徒の皆さんには、椅子を持つて体育館に行つて下さい。」社会科の先生、諏訪 信彦すわ のぶひこの声が、校内放送として全校中に響き渡る。

あーあ…。積木は大きくもつ一度ため息をついた。

第一二章「単細胞生物」（後書き）

ハイ、一日に一話投稿です。w

まあ、次回は何時になるか：w

（明日かも）

それではw

第三章「始業式＆着任式」

「え～…、皆さん、春休みは楽しく過いせましたか？」
早速校長先生様の「質問。

「うわぜーーー…、んなプライベートなコト
訊いてどうするんだよ…。
積木は苛々と思つた。

「…だから、えー、やつぱり春休みは読書するのが
良いと思いますよ…。例えば一日十頁本を読んだとしたら、
三十日、つまり、一ヶ月で三十五頁読める、ということです…。」

ホンナツ、ウザイ。んなことテメハーに言われなくて
わかるつづのー！

第一 そんな事言つならお前のデコハゲを
リー 2 にでも言つて直してこよ…、
コシチが笑えて集中できん。

「…………えー、そろそろ皆さん、私の話に飽きたかな？」
校長先生は皆の態度を見て苦笑混じりに言つた。

ハーン、とふざけた声が飛び交つ。

「えー… では飽きてきたようなので、

そろそろ皆さんに新しく本校に着任される

先生方を紹介します……。」

うえ……、やつと終わったと思つたら次は着任式か……。
どーせ生徒に好かれようと馬鹿発言して笑わせようとする単細胞な先生しかいなんだから、一々紹介しなくていいつーの！

積木は呆れながら思つた。

「えー、まずは昨年の長谷川先生の後に継ぐ、家庭科と音楽の担当となる、佐武^{さたけ}綾芽^{あやめ}先生です。

佐武先生は……。」

ハイ、長い説明省略。

佐武先生、校長先生の説明が終わると、椅子から立ち上がりにこやかに一礼。

背が低くて若くて、可愛いくて、男子に人気間違いなし、だらう。

「えー、次は昨年の西岡先生の後に継ぐ、

全学年国語担当の、小野寺 祐司先生です。

小野寺先生は……。」

ハイ、長い説明省略。

小野寺先生も、校長先生の説明が終わると、椅子から立ち、手を後ろに組んで軽く一礼。

積木は小野寺先生を観察した。

眼鏡を掛けている男の先生。顔はまあまあかな。

年は、担任の田宮先生より少し下つて感じ。（つまり45の上か下か。）

髪型は……、説明するのが難しい。前髪は

白髪と少量の黒毛が混ざっている。

後ろはほぼ全部黒毛。

後ろから見れば普通だけど、前からみれば、なんというか…、左と右に分かれていて…（七二ではない。）
左髪が左ちょっと上に靡いて、右は普通に少なくとも左髪よりは右下に靡いている。
まあそんな感じで、なかなか似合っている。

ハイ、小野寺先生の説明終了。（ほんとうに髪型だが。）

フウ…つかれた。

あ、

ちなみに、小野寺先生は二年一組の副担任で、佐武先生は積木の隣のクラスの一一年一組の担任だ。

「ハア……。」

「

教室へ戻るとすぐに積木は溜息が出た。
加奈と離れてのコレからの学園生活、

絶対つまらないだろーな…。マジ人間嫌いが酷くなるよ…。

第三章「始業式＆着任式」（後書き）

積木ちゃん…、言葉が
悪いですね… w

第四章「始まりの数学」

「……大丈夫か？」

「皆弛んでるぞ！何時までも春休み気分で
いると、期末試験で痛い目にあつぞつー大丈夫なのか！？」
田富先生の大きな声が一年一組に響き渡る。

ホンツトウザイ。校長だけでもつやーのに……。

「ノ学校つて何処まで煩いの？」

積木は前から二番田の窓側の席でそう思った。
新学期が始まつてまだ一日目。

授業もまだやつていなく、今はHR中だ。

「いいな、もう春休みは終わつたんだから、
ちゃんと授業に集中しろよ。一時限目は数学だ！」
そつ言つて田富一美先生は出て行つた。

ハア…。もう五十上なんだから（推定年齢 実際年齢不明）
そろそろ大人しくなりなさいよ…。

煩くてしようがない。怒るならもつとクールに、ねえ…。

積木は数学の教科書を出しながら心の中で呟いた。

「田富、うつぜえー。」

「デタ。積木はもう一度溜息をついた。
声の主は佐々木 啓祐。

頭はいいけど……、精神的に考えるとクラス一の馬鹿かしきり……。積木はノートを団扇代わりにして扇いだ。

「クラー、ちゃんと席に着きなさい。」

教室のドアをスルスルと開けて入ってきたのは、数学担当、前田 香澄先生。通称：前ちゃん。（積木と加奈だけの呼び名である。）前ちゃんは結構な人気モノで、話しやすくて生徒からも断然好かれている。（勿論加奈にも。）

「……、だからメイホール1700、マイホール1500。計3200円。

……、裕美架あー、わかるかー？」前ちゃんが元気よく全然聞いてなさそうつな裕美架に叫ぶ。

啓祐が耳をわざと塞ぎ、なんで塞ぐの一、と前ちゃんがまた叫ぶ。

うん、くだらない。馬鹿な学校。前ちゃんもアノ馬鹿に乗らなくてもいいのに……。

本でも読んでよっかな……。

積木はノリでちゃんと笑つておきながらも、心では全然関係ないことを思っていた。

第一、積木は数学が体育の次に一番嫌いなので、集中しようと思つてもできない。

糞メンドクセH…、学校なんてなんであるんだる…。

集団生活なんて大っ嫌い。

家で八時間勉強するのと、学校で四時間勉強するの、どっちがいい?と訊かれたら、間違いなく積木は八時間を選ぶだろう。

キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン
終業のチャイム。

皆が一斉にヨツシャア、と叫ぶ。

終業の挨拶をしてから、三分の一の生徒はすぐに前田先生のところにいく。

前田先生は、皆と話し、五分後、一年一組を出て行く。

「積木!トイレにこいつ。」裕美架が積木のところに元気よく来る。「ウンつここ!」積木も元気よく返事を返す。

「ア…、疲れた…。マジでこいつうざい…。」

加奈のほうが何倍もいい。

隣の、加奈のいるクラスは家庭科で、

家庭科室に行つてるので今は会えないのだ。

次は国語か 、アノ小野寺とかいう先生が、またうざい
西岡みたいな先生じゃないといいけど…。

積木は席に着くとすぐにそう思った。

まあ、でも大人しそうな先生だつたし大丈夫か…。

第四章「始まりの数学」（後書き）

今日は大丈夫か?
で始まり、大丈夫か、で
終わりました（。 。 （ 。 ）

第五章「小野寺先生の国語」

「起立、礼。」国語が始まり、日直の号令とともに、小野寺先生から学ぶ、初めての国語がスタートした。

「ハイ、皆さんとの初めての国語ですね。えー、着任式のとき紹介したように、私の前までの学校はとても小さい学校で、生徒が全校で十四人でした……なのでこの第三中学校の生徒をみたとき、とても人数が多くて驚いたよ……。」小野寺先生はひきつっているのか、本当に笑っているのかわからない微笑で挨拶をした。

「私はノ端出身で、皆の町づくり、という雑誌を知っているかな？」

私はそれを毎月読んでいるのだが……、この町の色々なことが載っているよ。

是非一度読んでみてください。」

ここで、何人かの生徒から知っている、という声が上がる。

「あー、この前私の出身地のノ端の市の名前をかえるってコトを雑誌に載つていて……、ソノ新しい名前を応募していたんだよ。」

「——といふ生徒の声。

「私も自分の出身地の名前だったの、名前を考えて投稿したんだよ……。ノ端はアンモナイトが昔とれたから、私は餡夢内都アンムナイトという名前がぴったりだと思つて投稿したんだよ……雑誌に。」

凄い、どうだつた、等の声が沸く。

「せつかくの良い名前（？）だつたのに落ちてしまつたんだ、

それで　が多い町だからという理由で投稿した人の

「ノ端」という名前に決まつたんだ…。雑誌のヒトは
何処に眼をつけているんだろうね…。

まあでも妻に報せたら、呆れた顔で何やつてるの?と言われたが…。

小野寺先生はまたアノ引き攣つているのか本当に笑つてゐるのか
どうかわからない微笑をした。

生徒が一斉に笑つたり、突つ込みを入れたりする。

積木は本来は呆れるのだが、今回は何故かちゃんと
話を聞いて、本当に笑つてしまつた。

ソレは何故なのか、今の積木には自分でもわからない。

第五章「小野寺先生の国語」（後書き）

はい、国語スタートです　ｗｗ

ANCHORと同時連載なので
投稿遅くなるかな、と思つたら、
結構毎日どうか一田2回投稿していました　ｗ

第六章「真面目・嫌い」

それから計一回国語があつた。

小野寺先生の国語は、前の西岡先生の国語とは違つて、ふざけたり、笑つたりはしなかつた。

前の西岡先生は、

自分の髪を捻りながら、「あのなあ、俺今五时限目でめんどいから
ちょっと勉強する気ないし、怖い話でもするな。」
と言つて、（決して傲慢というわけではない。
生徒に怖い話を聞かせたり、色々なゲームを
することも度々あつたが（そのため生徒からは人気。）
小野寺先生は真面目で、話が脱線することなく授業が進んだ。
先生の中では、小野寺先生が学校で一番真面目に授業をしていた。
(この学校は話を脱線させる先生が多い。)

馬鹿げた話をするのが嫌いな積木にとつては、
コツチのほうが断然良かつた。

「ねえ、ソッチのクラスでもやっぱ小野寺先生嫌われてる？」隣のクラスの加奈がそういってきたとき、積木は正直驚いた。

「えっ、なんで？ソッチのクラスで嫌われてんの？」
「コッチはそんな事ないよ。」積木は正直答えた。

「え～マジで…。」「ソッチのクラスさあ～、藤田とか
めっちゃ授業中小野寺先生のときだけ態度悪いさあ～。」
加奈も驚いたように言う。

「へえ～……。」積木は意外そうに頷いた。

コッチのクラスでも小野寺先生が嫌われているって
わかったのは、本当に加奈が小野寺先生がコッチのクラスで
嫌われている、って言つた次の日の国語だった…。

木下 郁美、（女）原田 信一、そして佐々木 啓祐の三人が
国語の授業中だけ、わざと大きく溜息をついたり、うざ…とかを聞

こえるよ！」

言つたり、フン、と鼻で笑つたりしているのだ。勿論小野寺先生に。

先生も気づいているが、注意は一回もしたことない。

それに、授業中で態度には表さないが、口ノ三入じやない他の生徒も、

ほとんどが小野寺先生を嫌つてゐると、感じでわかつた。

前の西岡先生とは正反対の真面目な授業を行つ小野寺先生が気に食わないのだろう。

それと、一回田の国語の授業中に言つた、ヒトの話を聞かないと成績も下がる、と言つたのがまづかったのだろう。（この学年は私語が多い。）

積木は小野寺先生を嫌つてゐる生徒に苛々してきました。

眞面目に授業をやるのが普通じゃないか、と思つからだ。

今は本当に、ただソレだけの理由だったと思つ……。今は……。

第六章「真面目・嫌い」（後書き）

いよいよ六章です。w

積木の恋愛相手は…、もうわかりますよね？w

第七章「仮面を脱いで…」

春の始業式から、一ヶ月弱経つた。

積木の学園生活に、何も問題等は起きなかつた。

何時もの様に、人間嫌いな積木は、ソノ顔に仮面を掛けた。

明るく、ノリのいい女の子という仮面をかぶつて生活した。

積木が本気で人と接していられるのは、加奈だけだつた。

加奈は頭は悪いし、趣味も違うし、性格も違うけど、何故か
加奈だけは馬鹿だとは思わなかつた。加奈だけなら普通に接してい
られる。

加奈のときは、普通に笑いあつてゐる。他の生徒へとは違つ。
本当に笑つて、加奈のときは、積木はよく笑う女の子だつた。

加奈のときだけ仮面をぬぐ。

いや、加奈の時だけじゃないかもしれない。

モウ一つの時間、積木は仮面を脱いでいる。実際に

喋らないし、他の生徒の前では積木は普通だろう。

だけど、自分で気づくのだ。私はコノ人を軽蔑していない、と。

国語の時間だ。

何故だろ？ 元から国語が好きだったからだろうか。
でも、ニッキー（西岡先生）のときは普通に軽蔑していた。
笑っているふりはしても、ずっと軽蔑していた。

でも、小野寺先生のときだけは違う。何故か、最初はわからなかつたが、
時期に薄々気づいてきた。

小野寺先生は、軽蔑の仕様がないからだ。

馬鹿な言動はしない。

生徒に好かれようと必死に冗談を言つたりしない。

彼は、軽蔑の仕様がない。

積木は悔しかつた。

自分に軽蔑をしない人間がモウ一人いるなんて…。

加奈のときもそうだつた。

初めて小学校で会つたとき、積木は加奈を軽蔑できなかつた。
他の生徒となんら変わらないのに。

だから積木は、必死で加奈を軽蔑しようつと、ずっとみていた。

だからずっと一緒にいた。

だから友達になつた。無一の親友に。加奈になら
なんでも言える。

それと同じに、彼の軽蔑点を探そぐと、
国語の時間、ずっと小野寺先生をみていた。
真面目を鏡にしたような小野寺先生を。

生徒にもまだ嫌われていた。真面目だから。

特に、郁美、信一、啓祐が酷かつた。

他の生徒は陰で文句を言つていただけだが、アノ三人は、最低最悪に態度が悪い。

（勿論私語も多い。）

ソノ三人の中で一番態度が悪いのは郁美だ。郁美は国語の時間だけ、教室の一番後ろに机をずらした。小野寺先生に近づきたくないから、と言つ。

小野寺先生は一回も注意しなかつた。

小野寺先生は一回も授業に関係ないことを話さなかつた。

でも、詩についてはたくさん語つた。

特に、石川啄木が好きらしく、石川啄木については色々教えてくれた。

死んでから詩が売れしたこと、元は小説家だったこと、かなりの不運な人だったこと等を。

凄い博識な人だつた。他にも、色々教えてくれた。全て国語関係だつたけど…。

勿論、アノ三人は、ハイハイ、と小さい声で、しかしハッキリと小野寺先生に聞こえるように言つた。

小野寺先生は

頭のいい人で、西岡先生より少し厳しいけど、（怒りはしないが。）
良い人だつた。

郁美たちは、アイツ（小野寺先生）は自分が頭良いと
思っている、と言った。

確かにそうだ。積木もソレはわかつていた。
アノ人は多分、内心自分が博識で頭が良い人だと思つて
見ればわかる。

でも、ソレの何が悪いのだろうか。積木にはわからない。
だつて、本当に小野寺先生は博識で頭の良い人だ。
認めなければならない事実だ。

第一、郁美たちだつて自分が頭良いと思つて
いるだろう。勿論積木もそうだ。誰だつてそんなんぢやないだろうか。
自分は凄く頭の悪い人だ、なんて思つて
いる人はいないと
ただ小野寺先生は、自分は頭が良いぞ、という
事を普通以上に強調して
いるのか、もしかしたら
オーラがでているのかもしれない。

そして、小野寺先生はいつもアノ引き攣つて
アレが精一杯の笑顔なのかわからない顔をよくした。

第七章「仮面を脱いで」（後書き）

本日一回目投稿ですw

何時になつたら

積木は への恋へ気づくのやぢ… (・・・)

第八章「職員室にて」

「積木、お願ひ！一緒に職員室についてきて！」

加奈は学校が終わり、一緒に帰ろうと誘った積木に
そうお願いしてきた。

「いいけど…なんで？さては…、悪いことでも。」

積木はわざと真面目な顔をして言った。

「そう…実は校長先生も一ブ2をつければ
いいのに、って言ったとき、丁度クラスに入ってきたや
なわけないじゃんっ！小野寺先生にプリント提出しなきゃ
なんないんだよね…ホラつ作文の！」加奈は慌てながらも
ちゃんとノリにノつて言った。

「小野寺先生に？作文つて…書くの？」積木は疑問に
思いながら訊いた。

「えつ、一組はまだ貰つてないの？」

夏休みうちら作文書くじゃん。アレを今くれるの。

今提出すれば、夏休みの国語の課題がなくなるんだよー。」

加奈は元気に言った。

「え、まじ？早くほしいー！で、作文提出しに行くの？」

「なわけないじゃん、早すぎだよ。今日説明されたばつかだよ。

作文の構成のためのプリントがあるの。ホラ、何について書くかと
か、

何を書きたいかメモるヤツ。アレを今日の国語の時間くれたの。

アレが終わつてOKがでたら原稿用紙もらえるんだよ。」

加奈はそう説明した。

「へえ～、夏休みの課題が終わる、か。

積木は早く作文を終わらせたくなつた。

「失礼しまーす。」積木と加奈はノックをして職員室へ入った。

小野寺先生はドアを開けたすぐ近くの机にいた。

アソコが小野寺先生の机か…、前ちゃんの隣なんだ…。

そんな事を思いながらも、積木は加奈の後に続いた。

「先生、構想表、書き終わりました。」

加奈は構想表を先生に渡しながら言つた。

眼鏡をはずしていた小野寺先生は、加奈が来ると眼鏡をかけて用紙を見た。

「うーん、題名を少し工夫したほうがいいね。ホラ、「私のクラス」、だけじゃなく、もっと工夫してかつこいい題名にしよう、例えば「一致団結」というふうに。構成用紙にソノ言葉があるからね…。」

小野寺先生は題名を書く欄に工夫と繋がり字で書いて、まるで囲んだ。

「うん。」加奈は頷いた。

「うんって…、ハイでしょ。」積木は呆れて言つた。

加奈はいつもそうだ。いつも中途半端な口調で答える。

頭より口が早く動くので、友達と田上の人への言葉をわけられないだろう。

前田先生にもそうだ。

「そうだろ、ハイだよ。」小野寺先生は微笑して言った。加奈はハイ、と言いながら笑つ。

積木は少し驚いた。小野寺先生も笑うんだ、と。いつも引き攣つたような笑いをしているからだ。微笑といえ、まともに笑うのははじめてみた。

積木はちょっとドキリとした。

「小野寺先生つて、意外に話しやすいよね～。」

加奈は職員室を後にしての帰り道に積み木にそう言った。

「そうだね。」積木も同意した。

意外な一面がみえたな…。

あの笑うときの顔、私ちょっと好きだな…。ちょっと紳士的つていうか…。積木は正直そう思つた。少なくともクラスの皆の馬鹿笑いよりはいいよね…。

積木はそう思いながら、夕暮れの道を、
加奈と別れてから一人でそっと歩き、自宅へと向かった。

第八章「職員室にて」（後書き）

ハイ、更新ですw

なんかANCHORを優先するとか
なんとか言ってANCHORよりも多く
投稿しています…。

何れANCHORを抜かすかも？！

第九章「笑顔と嫉妬」

「積木つ、私の部屋から数学の教科書とノート取ってきて！」

机の上にのつている筈だから。「積木の姉の月見は、一階から積木に教科書とノートをとつてくるよつ叫んだ。

姉の月見は、積木と同じ中学校の三年一組で、積木より一つ年上だ。

「えへ、私今勉強中なのに……。」積木は文句を言つたが、月見は聞き入れなかつた。

勉強を邪魔されたことに

苛々しながらも、月見の部屋の中へ入り、机のところへ行つた。

何時見ても荒れ放題。片付ける気ないのかコイツは。

積木は月見の教科書とノートを探しながら思つた。

：？ノートをみつけ、教科書を探していると、机の上に一枚の写真がのつているのに気づいた。
どうやら学校の集合写真のようだ。

積木は写真の下のほうを見た。【5／8二年一組修学旅行】と書いてあつた。

積木はなんとなくソノ写真を見た。

お姉ちゃんは左側にピースをして友達と写っている。
なかなかの笑顔。

真ん中に三年一組の担任、英語担当の大山 須恵子先生が
笑顔で写っている。ソノ横に校長先生。
積木は右側を見渡した。三年男子の顔。見覚えのある顔も
幾つかある。

男子の一一番奥に、保健の釜藤 杏子先生が写っている。

ソノ隣に 、小野寺先生が写っている。

積木は一瞬誰かわからなかつた。

ソノ理由は、満面の笑顔で写っていたからだ。
顔中に笑顔を満たした、真面目な小野寺先生。
いつも引き攣つたような微笑で授業の説明を
していた小野寺先生が、素敵な笑顔で集合写真に、
両手を後ろに組んで写っている。

そういうや、小野寺先生は三年一組の副担任だつたけ。

積木はソノ写真をみたとき、凄い敗北感と、
嫉妬に襲われた。

悔しくなつた。やはり私たちのクラスで
していたアノ微笑は、偽だつたのだろうか…。

正直ショックだった。三年一組のときは
アノ満面の笑顔で、私達のときは、あの引き巻り
笑い。偽笑。作り笑い。

悔しい…。ズルイ。お姉ちゃんのクラスだけ…。

私たちにも、いや私にもソノ笑顔をみせてほしい。

三年一組にみせた笑顔じゃなく、私だけにアノ笑顔を
みせてほしい。

アノ笑顔が、ほしい。

私が手に入れたい。

積木は強く思った。

第九章「笑顔と嫉妬」（後書き）

ハイ、またもや更新(* - -) (* - -)

ANCHORは一日一回、
アメのちクモリは一日平均一回..、
絶対ぬかされます、ANCHORW

第十章「苛立ち」

「積木つ、遅いー、何やつてるの？」

写真を持つてボーッと突っ立っていた

積木に、姉、月見の声が一階から降りかかる。

「ハ、ハアーイ、今行く！」積木は写真を持っているといふを見られたくない、すぐに返事をした。

積木はすぐに教科書とノートを持って一階に下りようとした。

でも……、やっぱ、写真も持つてこいつ…。

アノ大雑把な姉なら、集合写真の一枚や一枚無くなつても気づかないだろ?…。

積木は集合写真を手に持ち、一回、月見の隣の自分の部屋へ行き、机マットの下に写真を隠してすぐに下へ降りた。

「遅かつたねー、なかなかみつかなかつた?」月見は

積木から数学の教科書とノートを受け取った。

「うん、全然みつかなかつたよ…、机、片付ければ?」

積木は慌てて言った。

「めんどくさいからいーよ。」月見は教科書をパラパラと開いた。

さて、そろそろ誘導尋問でも始めるか…。

積木は牛乳を取り出しながら思った。

小野寺先生が三年一組ではどうなのか訊いてみなければ。

「てかわー、お姉ちゃん数学好きなの？」積木は何気ない感じで訊いた。

「えつ、なんで？」積木の思つたとおり、月見は不思議そうに訊く。「だつて、お姉ちゃん珍しく勉強してるもの。数学が好きになつたのか

なーつて。」そう言つた後、積木は牛乳でのどの渴きを満たした。

「別に好きつてわけじゃないけど……、受験生になると色々勉強しなきやならないんだから。本当は一番好きな国語からやりたいけど……、やっぱ苦手なヤツから、ね。」お姉ちゃんは戸棚からバタークッキーを取り出しながら言つた。

「えつ、お姉ちゃんつて国語がすきなの？」脈あり、と思ひながらも何気ない様子で積木は訊く。

「うん、アレ？ アンタも好きなんじゃないの？」月見はクッキーを頬張りながら訊く。
おしつ、計画通り！

「うーん、前は好きだつたけど……、今新しい先生ジャン……、小野寺先生だつて？ なんか真面目でつまんない。」積木は嘘をついた。

小野寺先生の名前を口にするビデオをキドキした。

「えー、嘘あ、アンタ真面目系好きなんじゃないっけ？

西岡先生の時、散々文句言つてたジャン。授業サボるつて……。」

月見は意外そうに訊く。

「うーん、最初はそう思つてたんだけどね……、実際に真面目系に對面してみるとねえー、やっぱ

西岡先生がいいや、つて思つた。真面目はやっぱつまんない……。」

積木は苦しい嘘をつく。

「第一、うち等のクラスで嫌われるよ？隣のクラスでも。積木はそう付け加えた。これからが誘導尋問開始だ。」

「えーマジ？ なんでえ？」

うちらの学年では普通だよー、やつぱ二年にもなると授業集中しなきゃならないし…。

それに小野寺先生時々「冗談言つて面白いときもあるし。

まあ他の先生よりは真面目だけどね。でも大人っぽくて良くない？」

！？」れには意外だつた。

時々冗談を言つて…。私たちのクラスのときは全然そんな事なかつたのに…。

でも、やつぱ最初のときはあつたよね…。

てことは…、うちらの学年授業態度悪いヤツ多いから？ 郁美とか啓祐とか…。アイシラのせい？

「やつぱねー、馬鹿丸出しつてのも嫌だからねえー、アレぐらいが私には丁度いいかも。」

月見は数学のノートに文章題を書きながら話を続ける。

「そう…、なんだ、やつぱね。」

積木はなんとかその場を取り繕つて早足で部屋へ向かつた。

やつぱ、違うの、かあ。

当たり前だよねえー、写真にアノ笑顔だもん。

副担だし…。

三年生は大人だし…。

ハア……。

嫌だなあ…。私もお姉ちゃんのクラスだつたら
良かつたな…。

先生つて、実は結構楽しい人だつたりして。
そりゃ真面目だけど。

職員室でも話しやすかつたし…。

加奈なんてウン、て答えたほどだしね…。

羨ましいなあ…三年…。

つーか、正直アイツらのせにじゃん。

アイツらが授業中馬鹿丸出しあがめてるから…。

小野寺先生にだけ態度が悪いから…。

積木は思い切りベッドを蹴った。
足がジンジンする…。

でも、マジでムカツク。

私はなにも悪くないのに、なんで…、
小野寺先生の笑顔がみれないのよ…。

消えれば良いのに…。

あんな奴等。

アイツらのせいだ、

私まで小野寺先生に嫌われてるんじゃないの…。

私たちは小野寺先生に差別、なんていう資格も無い。

だって悪いのは私のクラスだから。
態度を悪くするのがいけないから。

誰だって自分を嫌っているヤツに笑顔なんてみせない。
ましてや授業さえも全然訊かない。

アイツら三人が真面目に授業聞いてれば嫌われなかつたんだ。

仮面を被るのは私じゃなく、アイツら二人じゃん…！

積木は物凄い怒りが湧いてきた。

第十章「荷役」（後書き）

ハイ、どうぞん更新中ですwww

つこじ十章田です..。

AZUCHORおであと十章!~w

第十一部「会いたい思い」

朝。

積木は早足で学校へと向かつた。

昨日は小野寺先生の事を考えたり
集合[印]真みたりでなかなか眠れなかつたのだ。

睡眠時間、五時間。やつぱいかなあ…。

クラスの平均睡眠時間つて何時間なんだろ。

積木はそんなくだらない事を考えながらも
遅刻しないため、早足で学校へ向かつた。

「おっはよー積木つ。遅かつたねー。」

「フウ…ホンツト此処来るたびに溜息ができる。
また仮面を被らなくちゃならないのか…。」

「おはよー裕美架ー昨日ちょっと寝坊しちゃつて…。」

積木は指定鞄を机に置きながら笑った。

積木はチラツと教室の左側に位置する黒板を見た。

今日は国語は無いか。

昨日の夜何回も時間割を確認して嘆いたので、それくらいわかつていたが、

モウ一度確認すると昨日よりショックだつた。

国語、やりたかつたなあ。

小野寺先生に会いたかつた。

積木は姉の月見が昨日言つていた事がグルグルと頭に回つた。

小野寺先生が一番好きなクラスつて、三年一組だろうな。

恐らく一番嫌いのが此処、二年一組。

最低最悪。積木は馬鹿騒ぎしている啓祐たちを強く睨んだ。

国語、やりたいやりたいやりたい

あーあ…国語やりたいなあ…
国語なら脱線しないのに…。

つまらない…。

マジマジ…。脱線させんなよ糞先公が…。

だからその分脱線が多い。

ハアア…、また始まつたよ、脱線。

今は一時間目の家庭科。

佐武先生はコノクラスでは中の上くらいの人気で、結構皆と話す。

積木は家庭科のノートに国語、と書き、まるで囮んだ。

今日は国語が無いなんて…、明日はあるけど…。
つーか大事な教科なんだから毎日やれよなあ…。

積木がクラスでのストレスをふっとばすのは国語しかない。

小野寺先生の顔を見てみたい 。

積木はもう、自分が小野寺先生を求めて「これにて」と氣づいていた。

それも昨日の夜に。

いや実際は、もっと前からかもしれない。

確實に気づいたときは恥かしく思つたけど、もう自分の中では認め
つつある。

年齢何歳違つんだ、とツッコミたかったけど、積木はもともと
自分より年上がタイプだつてわかつていたから仕様が無い。

少なくとも年齢三十上にしか目が向かないのだ。

同学年なんて絶対百パー無理。

家庭科が終わり、数学に入った。

暇 。また話の脱線に入った。

もとから大嫌いな数学なのに、コレ以上嫌いにさせんてくれ、
前ちゃん…。積木はノートに絵を書きながら思つた。

あーあ…国語やりたい……。

こんな馬鹿共と数学勉強してどうなるのさ…。

それだったら小野寺先生に一人で国語をずっと教わっていたほうが
良いよ…。

そういうや小野寺先生つて、生徒数少ない学校にいたんだっけ…。

いいなあ…。人数少ないと話しやすくなるからいいよね…。

私も人数の少ない学校が良かつたな…。

小野寺先生が居ないと意味ないけど。

「大好き」。

積木は数学のノートにそう書いた。

誰に当てたかは言つまでも無い。

ヤバイ…。考えるだけでも恥かしい…。

小野寺先生と話がしたいなあ…。
どんな人なんだろ、先生つて。

そーいや……奥さんいるんだつけ……。

最初の授業のとき、いぬつて言つてたような……。

どんな奥さんなんだる……。

優しいのかな……。

ご飯とか作つてあげるんだろうな……。

話したりも……。

小野寺先生も、アノ笑顔で……。

うん、ムカツク。

わかってる、これが嫉妬だつて。
嫉妬つて醜い感情つていわれるけど、

本当にそつなかなあ……。

小野寺先生、今何処で授業してるんだろう……。

積木が空き時間に考えることは小野寺先生の事ばかりだった

年齢の差や奥さんもいて……、生徒と先生で……

叶わない恋だつてわかつてゐけど、好きになつたんだから仕様が無い。

これが積木の儚い初恋だつた。

第十一章「作文」

木曜日。

積木は朝から張り切っていた。

今日は一時限から国語があるので。

恐らく、コノ前加奈が言つていた作文の説明をするのだろう。

「おはよう、積木！」

何時ものように、裕美架が笑顔で挨拶をしてくる。

「おはよー！ 裕美架！」

いつもは溜息がでそうになるのだが、積木は今日だけはおはよう、糞野郎、と心の中で元気に挨拶した。

「起立、礼。」

日直の挨拶とともに、積木が心から待つていた国語が始まった。

郁美、信一、啓祐の三人はやる気なさそうに話している。郁美は特に酷く、トランプでもやる？と冗談で信一と啓祐に笑いながら言った。（実際やらなかつたが）小野寺先生は聴こえているはずなのに、無視をする。

前、一回だけ聞いてなきやわからないぞ、と特に名前を指摘せずに軽く注意したが、あれきり一回も注意をしていない。授業を聞きたいやつだけ聞き、聞きたくないやつは聞かないでよし、なのだろう。

そこがまた積木には格好良く感じた。

やっぱね、授業聞かないで話している一部の馬鹿野郎に注意しても

「聞かないんだから、無視をして内申点を下げてればいいのよ。積木は礼をしながら思った。

「はい、今日は夏休みの課題の作文をやります。この作文は一学期中にやつて出しても良いので、出したら夏休みの国語の課題はなくなるよ。」

やつた、と一部の声が聞こえた。

「作文の成績は一学期のに入れるけど、

一学期中に出しておいたほうが言いと思つよ。

夏休み中作文の事を考えながら過りしても楽しくないだろ？？」

小野寺先生は自分の頭を指し、言った。

一部の生徒が頷く。

積木も頷きたかつたが、恥かしくてできなかつた。

「で、今回の作文は基本的にはなんでもありだが、生徒全員、市のコンクールに応募をするんだ。

市で募集している作文コンクールの題は一つあって、意見文ないし生活文がある。自分がどれに応募しようか選ぶのではなく、

皆が私に提出した作文を私がこの一つのどれにあたるかを選び、市に送るよ…。」小野寺先生はゆっくりと説明した。

一部の人人が隣の人、「何書く？」と聞いた。

「えー、まず、いきなり書くのではなく、構想表というのを書きます。

構想表、というのは作文を書く前のメモみたいなもので、

そのメモに沿つて作文を書きだす。まあ…いきなり

作文用紙を配つて、はい、書きなさい　じゃ書けないからな。

小野寺先生が皆に構想表を配る。

「早い。配るのが驚く程早い。ちゃんと列の生徒の数だけを配り、一枚多いですとか少ないです、などというものはいない。正確な人…。積木は小野寺先生が配るのをボーッと眺めた。

どれにしようか… 積木は何を書くか迷った。

基本的には何でもいいのだが、

ただし、みんなの書くような幼稚なモノは嫌だ。

小野寺先生の注目を集めたい。大人っぽい、カッコイイモノにしよう。

目を引くようなヤツ…。

数分後、積木は何を題材にするか決めた。

『善、悪、偽善』…。よし、これを題材にしよう。
うん、なかなかいいじゃないか。

積木は自己満足した。

それから、何を書くか、つまり作文の材料なるものを
書くところに目を向けた。

材料はすぐに決まった。前、積木が考えたことをそのまま
材料とし、書いた。

材料1 善と悪の違い

材料2 善と偽善の違い

材料3 善のない正義は可能?

材料4 偽善じやない書つて…?

材料5 善、悪、偽善は同じ?

積木はそう書くと少し躊躇つてから小野寺先生の所に行つた。
(積木が来る前に二、三人着ていた。)

小野寺先生は暫く積木の構想表を見ていた。

凄く緊張する……。積木は心臓が高鳴るのがわかつた。

「うん、面白そうだね…、ただ、材料1と2の具体例を
入れたほうがいいね。じゃないと論文になるから…。」

小野寺先生は積木のほう見ると軽く微笑を顔に表し、言つた。

「...はい。」

ヤバイ...凄く緊張する...。

小野寺先生は材料1に具体例と繋がり字で書き、まるで囲み、積木に作文用紙を四枚渡した。
積木は緊張のまま自分の席に戻った。

第十一章「作文」（後書き）

十一章目です。w

これからもまだまだ続くと

思いますので宜しくお願ひします。

第十三章「作文提出」

積木はその作文を早速書き始めた。

目標：今日までに終わらせる。

それが積木の今日の目標だった。

理由は勿論、小野寺先生に早くに提出し、注目させるためだ。

作文四枚を学校で終わらせるのは他の生徒には不可能なことだったかもしだれないが、積木はもともと作文を書く才能があった。

一時間目の中休みも書いた。

数学は始まりの時間の四・五分先生にばれないように書いた。

二時間目の休み時間も、三時間目も、給食時間も……。

恋愛パワーって凄いな、と我ながら関心しながらも

早く仕上げ、提出するため猛スピードで書いた。

クラスの女生徒は、「す」「ー」、今書いてるの?などと

積木の周りにわざわざ集まって言つてきた。

マジでうざい…、積木はクラスの生徒に笑顔を見せながらも、心の中でそう呟いた。

昼休みの終わり「ひり…、よし、作文、いける。

作文が丁度、四枚目にいたとき、啓祐が積木に話しかけてきた。
「ちょ、河嶋、今作文やつてんの?」

うつぞー、話しかけんなよ。小野寺先生の敵は私の敵なんだから…。
と思いながらも一応顔を上げた。

「 そりだよー、すつごいでしょ。」

裕美架がまるで自分のことみたいに笑顔で啓祐に言つ。

どうやら裕美架は啓祐に気があるらしい。

「 へえー……。」 啓祐は裕美架のほうを見ずに

積木の作文と、ずっと作文を書きあさつている積木を見る。

積木は早く行けコールを心の中で繰り返した。

しかし、ソノ思いには反し、なおも啓祐は積木の作文と顔を交互に見る。

おっしー！終わったあーー！積木は五時間目の家庭科の時間を利用して終わらせた。

積木は見直しをし、帰り際、加奈に、職員室行つていい？
と訊こうとしたが、やめた。なんか会うのが恥かしくなってきたのだ。

作文に自信はあるが、もしかしたら誤字があるかもしれないし、明日どうせ一時限目に国語があるからだ。

次の日

一時限目の英語の後の国語。

積木はすぐに作文を提出了した。

すると、皆が一斉に積木と先生のほうをみた。

「 早ーい！積木ー。」 歩夢が積木に言った。皆も驚く。

アンタ達とは違うんだから……といつもは優越感につかうのだが、今は小野寺先生がいるという事で胸が高鳴り、それどころじやなかつた。

「早いなー。」小野寺先生は少し驚いたような顔をし、作文を受け取つた。

ソノ作文が全校で一番早く提出したのだ、と積木に教えてくれたのは、小野寺先生ではなく、担任の田富先生だつた。普通は教科担任がその場でいつのだが、小野寺先生のときは違つた。

そこにまた積木は思いが引かれた。
一々生徒に直接言わず、後で生徒の担任に言つてくれたのが、積木には嬉しかつたのだ。

第十四章「思わぬライバル」

「あれえ……」

積木が姉の部屋に口語辞典を借りに行つたとき、姉は机の上で何か探し物をしていた。

「何探してるの?」積木は何となく訊いた。

「うーんとねえ……修学旅行の集合写真。」

姉の月見は探している中、顔を上げずに言った。

えつ……月見は本棚の中から口語辞典を探す手を止めた。

「ふうーん……集合写真見つからないんだ……。」積木は怪しまれずに言う。

流石に貴方の写真は私のデスクマットの下にあります、なんて言えない。

「うん……大事な写真なのに……。」月見は残念そうに顔を上げた。悪いことをした、と罪悪感が湧いてきたが、写真を返す気はなかつた。

「そつか……でも、お姉ちゃんつて写真大事にするほうじゃないジヤン?」

前、二年の宿泊研修のときの写真、落ちっぱなしだったよ。

積木は早く忘れさせようと思い、言った。

「あの写真は大事なのよ……小野寺先生写つてるし……。」
は? 積木は頭にハテナマークが浮かんだ。言つた意味が最初はわからなかつた。

……今なんと?

「え……ちょ……なんで小野寺先生写つてるヤツが……?」

積木はからかう様に笑つたつもりだったが、顔がかなり引き攣つて

いた。

「副担任だから一緒にくるんだよ?」月見は机用の椅子に腰掛けながら言つた。

「いや……じゃなくて……お姉ちゃん先生の事好きなの……?」積木は引き攣つた顔のまま言つた。自分でも思う、力ナリ勇氣のある質問だと。

そして、ソレの答えも。

答えが聞きたくない……。

「うん、なんか良くない? 小野寺先生。冷静で面白いトコもあって。

」

月見はやや恥かしそうに言つた。

パニック状態の積木は固まりながら言つた。

「でも……先生って奥さんいるんじやなかつたつけ……? 年齢の差だつて……。」

自分で言つたソノ言葉が自分自身の心に深く刺さり、哀しかつた。「まーそうだけどね……でもなあ……」月見も哀しそうに顔を伏せた。

積木は口語辞典を借りるのも忘れ、そのまま無言で、呆然と姉の部屋を出た。

第十四章「思わぬライバル」（後書き）

今回はちょっと短めです（・・・・・）

第十五章「好きが嫌いか」

……積木は自分の部屋のドアを閉めると、そのままドアの前に倒れこんだ。

……姉妹は同じ人好きになるって聞いた事あるけど、まさか同じ先生に恋するなんて……。

正直凄いショックだった。

ソノライバル相手が、自分が軽蔑できるほど馬鹿騒ぐする奴だったら、

戦う意味がない、と相手にしないけど、お姉ちゃんは違う。私より明るいほうだけど、馬鹿ではない。軽蔑もしていない。もしかしたら、私より上なのかもしれない。

……負けてるかもしれない……

それに、三年一組は小野寺先生が副担任だし、明るく素直なクラスでよく笑ってくれるし、授業も真面目に受けるし……。

負け、だよね。

「アンタ……なにしてんの？」そのまま呆然としてたら、田の前に月見が居て、積木の田の前で指を鳴らしている。

「なにしてんの？」月見はわざの質問を繰り返した。

「お姉ちゃんも……なんで部屋に勝手に入ってきたんの？」

さつきの事があり、積木はつい声を荒げた。

「積木、口語辞典もつてくの忘れてたから……。」

月見は少し考えてから言い、口語辞典を差し出す。

積木は月見から辞典を受け取り、自分の本棚に荒々しく置く。

そんな積木の動作をみながら、月見は言った。

「そういや、積木、作文全校一位で提出したんだってね。」

積木は止まつた。急に言われて吃驚する…。

「何で知つてんの？」また口調が鋭くなる。

「小野寺先生が言つてたから……、国語の時間。

河嶋の妹、全校一位で作文提出したぞ、つて。」

月見は少し間をおいて言つた。積木は先生が自分の事を言つてくれて嬉しかつたが、今は、誰にも向かない苛立ちが湧いてきていたので黙つていた。

「……何怒つてんの？」月見は遠慮がちに言つた。

積木は動きが完全に止まつた。

「べ…つに怒つてなんかいないよ…。」積木は固まつたまま言つた。表情が固まり、笑いたいけど笑えない。

「……小野寺先生の事…？」姉は躊躇いながら訊く。

……また気が遠くなりそうだった。

なんて言つて良いかわからない。

姉の口調からわかる。

ノーと言つてほしいと。だけどそれでは負ける気がした。

「……うん。」積木は静かに答えた。

ソノ言葉が、積木自身に一番強く、厳しく刺さつた。

第十六章「やっぱりライバル？」

「そつか……。」月見も以前の積木と同じように、表情が固まっていた。辛い沈黙が流れる。

しかし、その沈黙を破ったのは他でもない、月見だった。

「やっぱ姉妹だね……。」

月見は積木の顔を見ずに、独り言の様に言った。
怒っているのだろうか……。

「……なんでわかったの？先生の口ト、私が好きだつて……。」

積木は静かに訊いた。また暫くの沈黙。

「うーん……やっぱさつきの態度、かな……。煩く言つていた口語辞典忘れてくし、怒つてたし……。」

月見は顔を見せないまま言つた。

「「めんね……。」積木は申し訳ない気がしてきて、謝つた。

「積木が謝ることじやないよ……。」月見は静かに言つた。

暫くの沈黙

「ライバルだね。」突然顔を上げて月見が言つた。
は？また意味がわからない言葉が聞こえた。

「何が？」

「何がって……恋のよ。」月見は微笑しながら言ひ。

積木はまた固まつた。というより言つてゐることがよくわからなかつた。

「ちょっと……また固まっちゃつた……。何アンタ、もしかして私が手を引くとでも思つてたの？」月見は笑いながら訊く。

積木はイエス、という答えが頭に浮かんだ。

だつて普通そだらう。普通の姉なら私の事を気遣つて、私はもう三年だし……どうせ卒業するんだからいいや。

とか言つてくれるだらう。それなのにこの姉は……。

積木は呆れながらも笑つた。

「何笑つてんのよー、気持ち悪い。」月見はそう言ひながらも一緒に笑う。

ライバル　か……。

私のライバルは先生の奥さんだけかと思つてたけど他にもツワモノ（？）が居たんだ。

積木はそう思つたけど、さつきの苛立ちは消えていた。

「ライバル……、ちょっといいかも……。」

積木はベッドに顔を伏せながら一人呟いた。

第十七章「レストランにて」

「ねえー、積木、今日プリ撮りに行かない？」

加奈は一時限目が終わった十分の休み時間、積木をプリント俱楽部へと誘つた。

「オーケー。学校帰つたらすぐね。」

積木は、今日は何も予定がなかつたから了解した。

「積木ー、笑つて！」加奈は元気に言った。

今は「アップ」で撮つていて、互いの頬がふつつく。次に「全身」でピースをして写る。

なんか……小野寺先生とプリ撮つてみたいな……。

積木は加奈が積木にあげるため、でてきたプリクラを均等になるよう、十個ずつ切つているのを黙つてみつめながら何となく思つた。

やっぱピースはないだろうね……。

きつと後ろに手を組んで写るだろうな……。

積木は、小野寺先生がいつも始業の礼をするときの、後ろに手を組むやり方を思い出した。

「はい、積木のぶん。」加奈は積木にプリクラを渡した。

「サンキュー、おなか減ったからビックリんー行かない？」

「OK。つむちも行きたかったあー。」

積木と加奈はプリント俱乐部を出、すぐに向かつた。

「食いすぎんなよー。」加奈はにやにや笑いながら、メニューをみている積木に、わざとでかい声で言った。

「やめてやー、恥かしいしょや。」積木はわざと怒ったフリをして言った。

結局、なんとなくゆつくりと積木と話がしたかっただけで、あまり食べる気はなかつたので、一人で食べるよう、フライドポテトを頼んだ。

十分後。楽しく談笑しながら、フライドポテトを食べているときだつた。

「いらっしゃいませー」店内にとりわけ大きい声の女性店員が客を席へと案内する。

「じゃー、前ちゃんが…」積木は笑いながら加奈に話しを続ける。

「…あ、小野寺先生だ…。」加奈は驚いた顔で先生が店員に案内されている

所を釘付けされている。

積木は思わずポテトを落としそうになつた。

「嘘……。」

幸い（？）相席にはならなかつたが、先生は積木たちの斜め前の席だつた。後ろを見れば、すぐバレるだらう。

積木は心臓が高鳴るのがわかつた。緊張する…。

「ほら、いきなつてー。」前をみると、小さい声で、

加奈がにやにや笑つている。

え？ま、さ、か……。加奈にバレてる？

しかし、よくよく考へるとそれではなかつた。
積木と加奈はよくこのよくな[冗談会話]をする。
ニッキーのときもそうだつた。

「いやーカッ」「いいー、『めん、ちょっと行ってくるね。先帰つていいよ。』

積木もノらないとバレそうな気がしたので、わざと真面目な顔をして、

席を立とつとした。

「ごめん、警察行つて来る。」加奈もそれにノリ、積木に負けない
くらい

真面目な顔をして立つフリをする。

積木はやめてやー、と笑いながら小さい声で言った。

「普通にありえないから。ごめんっ、ホンシトごめん。」積木は、
先生の

横顔を見、謝る様に手を自分の顔の前に出す。加奈も低い声で笑う。

見られないかな… 積木は見つかってほしい気持ち半分、見つからないで

ほしい気持ち半分で小野寺先生をみつめた。何注文するんだろ…。

「奥さんとかきてないのかなー。」加奈は興味深々で先生を見る。

「やめなつてー、喧嘩したんだから……、今親権問題で争つてる
最中なんだから… 可愛そうでしょ…。」積木はわざと怒ったフリを
した。

加奈は思わず吹き出し、その笑い声でこっちを小野寺先生に見られ、
ついに見つかってしまった。

しかし、小野寺先生はこつちに来ず、積木たちに微笑み、手をあげて声を出さずに挨拶をした。

積木と加奈も、座つたまま礼をする。

物凄く緊張する…積木の胸は今までにはないほど高鳴っていた。
今の話、聴こえてないといいけど……。
でも多分大丈夫だつた。先生のほうを気にして、そんなに大声で話
していないから。

積木と加奈は小野寺先生が居ることであまり話せなくなり、
帰り際に、先生にまた一礼をし、早くに店内を出た……。

第十八章「接近」

放課後　。一階技術室。

積木はしおり作成に追われていた。

積木の学年は、七月に宿泊研修へ行くのだ。

そのしおり作成、所謂しおり班が積木、啓祐、加奈（隣のクラス
だが

手伝いに来ている）、方淑の四人だ。

方淑は今年、中国から親の仕事の都合で転校してきた子だ。

方淑は同じ班だけあり、積木とも良く話す。

…終わり…

かなり大雑把な出来だったが大体は終わり、帰ることにした。

しかし、方淑の構想表を小野寺先生に持つていい、作文の説明を、方淑が受けないとならないのだ。ソノ説明を方淑が聞きにいくのに、積木も加奈もついていくのだ。（勿論、積木は自分から誘いに乗つた。）

職員室

いつも小野寺先生が座っている机に先生は居ない。

積木と加奈は、小野寺先生の隣の机の前ちゃんと訊いてみた。

「前田先生、小野寺先生いませんか？」

「いるよ、今来るから。」前ちゃんはわざわざ顔をあげ、笑顔で言った。

加奈が笑い返す。

前ちゃんと暫く談笑していると、小野寺先生が手に一年生用のワークブックを持って、職員室に入ってきた。

「先生、燐（方淑の苗字）さんの作文のコトなんですが。」「積木はゆつくりと言つ。

やはり緊張する…。

加奈がにやにや笑っている。

加奈、私が先生の事好きだつて知つてるな…まあ冗談で、だらうけど。

「ああ、そうだつたね。じゃあ会議室まで行こいつか。」

小野寺先生は、ワークブックを置きながら言つ。

「先生、会議室は、今しおり作成の班が使つてこますので…。」
積木は緊張しながら言つ。

「そなのか…、じゃあ近くの技術室まで行こいつ。」

技術室…今は多分誰も使つていなからいいか。

積木は加奈を職員室においていき、（前ちゃんとの話が続いている）方淑と先生と三人で技術室へと向かつた。

先生は手つ取り早く電気をつけ、方淑を椅子に座るよう促す。

「うーん……。」

小野寺先生は、方淑の構想表を見ながら唸る。

積木は前みたからわかる。「世界平和について」だ。
しかし、「コレを中国語で書くのは難しいだろう。

「河嶋さんのも難しいけど…、燐さんのも難しいな…。」
先生は積木のほうを笑いながら見て、言つ。

褒められていいのかどうかわからない言い方に、

積木も人懐っこい笑みを見せる。心臓はバクバク（？）状態…。

「河嶋さん、 そいや、 小説を書きたい人の本くという本を読んでいたね。

小説家になりたいのか？」

「ええ…まあ。」

積木は恥かしくて一瞬あつた目を逸らし、頷いた。

そこで加奈が入ってくる。

加奈は積木の肩に抱きつき、方淑の構想表を見る。

「よし…、うーん、燐さん、これじゃあちょっと難しいだろうから、別の事を書いてみたらどうかな？例えば…日本に来た感想とか？」

先生は方淑のほうに向き直って言つ。

それからは方淑への説明が続く。

小野寺先生は、方淑一人だけに話しかけず、積木と加奈の事にも笑いながら話しかけてきた。積木はだんだん、緊張感がなくなり、（そこに加奈と方淑がいたからもあるだろう）普通とまではいかないが、

前よりはワク話せるようになつた。

作文の説明が終わると、先生は方淑に将来、どうしたいかを聞く。方淑は英語が凄いでき、発音も英語の先生に負けないくらい良い近くの国、韓国の言葉も大体は話せる。

つまり、英語、日本、韓国、中国の四つの言葉を話せるのだ。そのうえ、大学へ行つたらフランス語を学びたい、という。小野寺先生もフランス語が少しはできるらしく、色々教えていた。積木はそんな一人の会話が羨ましがりながらも、じっくりと聞いていた。

…三十分後…

「よし、そろそろ帰るか。作文は夏休み明けの提出でいいから。」

先生は技術室の鍵を閉めながら方淑に言う。

「先生、正座、なんですか？」方淑はギクシャクした日本語で小野寺先生に

訊く。何故か方淑は、知り合つた人に、絶対に正座を訊く。

「えー、正座かあ…言つたら笑つから嫌だ。」先生は苦笑しながら言つ。

「教えてくださいよ。」積木も加奈も訊く。

先生の正座、是非知りたい。

「…八月二十四、乙女座だよ…。」

三人とも笑う。加奈が、この顔で乙女座とは…と笑いながら言うのを積木は横腹を殴つて止める。

「乙女座のA型さ。」小野寺先生は恥かしそうに血液型を付け加える。

A型、か…。私はO型だから、同じOだつたら良かつたけど…まあO型とA型は

あつらしいから良いか。（と言つてもO型は誰とでも合ひのだが）

「ああ、鍵は私が戻るついでに返しておくよ。」先生はそいついで、積木の手の中にある、技術室の鍵を見た。積木は礼を述べ、ゆっくりと渡す。

一瞬、二人の手が重なる。暖かい手…積木は恥かしくなり、そのまま歩き出す。

「河嶋さん、小説書いたら見せてくれよ。斎藤さんはワークブックも漢字ノートも

作文も出してないから早くしなさい。」

小野寺先生は職員室の前まで来ると、積木と加奈を交互に見ながら言った。

積木は照れ、ハイ、と小さく頷き、加奈はえー、等と口走る。

「えーって…ちゃんと出せよ…。じゃあ、気をつけて帰れよ。」

小野寺先生は苦笑交じりに加奈を見、それから笑顔で手を上げ、さよならを言つた。

なんか良いなあ……、いついつの。当然ながら積木も思う。

誕生日と正座と血液型がわかった、か……。

積木は加奈と方淑と別れてからの帰り道を歩きながら思つた。

あとは年齢よねえ……。今度また話せる機会があつたら訊こい。

仲良く話せて良かったな……。お姉ちゃんの言つており面白こい、話しやすいよね。

だが、積木は小野寺先生と話したことで、あることに気づかされた。

もう、告白は絶対できない

結構親しく話せたのだ。今までの全然話していない状態なら良いが、

今はもうだめだ。

これから告白なんて、恥かしくてできない。

それが悲しいのか、安心なのか、積木は深く溜息を吐いた。

第十八章「接近」（後書き）

> 小説を書きたい人の本へ
成美堂出版で本当にあります。
ためになると思いますので、
是非読んでみてください。w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7039a/>

アメのちクモリ

2010年10月20日19時58分発行